インバル・ピント待望の新作、世界初演

作品発表ごとに話題をさらい日本でも人気の振付家インバル・ピントと、盟友であるアヴシャロム・ポラック。彼等の舞台にはしばしば奇想天外な生き物や人物が登場。一瞬にして観客をポエジー溢れる異世界へと誘う。ファンタジーや闇、ユーモアやノスタルジーが渾然一体となった、あるいは希望と恐れとが入り交じるいつかみた夢を想わさせる世界。誰もが自分の心に重ね合わせて感じることができる。彼等の舞台が大人のみならず子どもたちをも魅了する理由はそこにある。

11月に埼玉で世界初演される新作だが、インスピレーションの源のいくつかは日本の文学や音楽、とりわけ宮澤賢治の物語だという。彼等の創作のスターティング・ポイントでもあるスケッチや水彩でのデッサン、ダンサーたちとの対話をとおしたリサーチは既に始まっている。新作には日本からも大植真太郎と森山開次の二人がダンサーとして参加する。本格的なリハーサルは8月のイスラエルにて。次号ではその模様もお伝えしたい。どのような仕掛けで日本の観客を驚かせてくれるのか、彼等から目が離せない。

速報　インバル・ピント・カンパニーの過去の作品からスケッチや舞台写真を集めた展示を開催

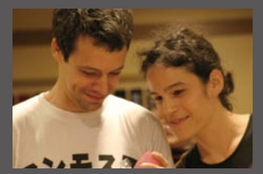
●●●●● EXHIBITION ●●●●●

インバル・ピント・カンパニー　スケッチと写真展

【日時】7月24日（火）～　公開 9:00～22:00　休館日を除く
【会場】彩の国さいたま芸術劇場 ガレリア　入場無料

PROFILE

インバル・ピント・カンパニー　Inbal Pinto Dance Company



インバル・ピント（右）とアヴシャロム・ポラック（左）が率いるイスラエルを代表するコンテンポラリー・ダンス・カンパニー。1994年の結成以来、『オイスター』（99年）、『ブービーズ』（02年）等、革新的で、想像力豊かな傑作を発表し続け、世界でもトップクラスの人気を集めている。一昨年の来日公演は、NHK教育「芸術劇場」でも放送され、大きな話題を呼んだ。インバル・ピントは、グラフィック・デザインを学んだ後、バットシェバ舞踊団に参加し、ダンサー・振付家として活躍。92年にアヴシャロム・ポラックと出会い、94年カンパニーを結成。『Wrapped』（98年）で、ベッシー賞を受賞。カンパニーとしての活動以外にも、オペラや演劇の振付も行っている。アヴシャロム・ポラックは、俳優として数多くの映画やテレビに出演するとともに、シェイクスピアやチェーホフの舞台にも出演。インバル・ピントとカンパニーを結成して以来、全ての作品を、共同で創作している。

大植真太郎（おおうえ しんたろう）

1992年より渡欧し、ハンブルク・バレエ団、ネザーランド・ダンス・シアター、クルベリー・バレエを経て現在フリー。スウェーデン国立オペラ、クルベリー・バレエ、Noism06等に振付。ダンサー・振付家として国境を超えて活躍している。『del a』（05年）でハノーファー国際振付コンペティションにて最優秀賞受賞。ノルディック・グランプリにて最優秀賞ならびにオーディエンス賞を受賞。

森山開次（もりやま かいじ）

しなやかながら強靭で、空間を切り裂くような独特の表現に定評があり、2001年エディンバラ・フェスティバルにて「今年最も才能あるダンサーの1人」と評される。神社境内での公演、能とのコラボレーションなど実験的な活動を国内外で展開。05年ソロ作品『KATANA』で「驚異のダンサーによる驚くべきダンス」（ニューヨーク・タイムズ紙）と評され、07年6月にはヴェネチア・ビエンナーレにて新作発表など躍進を続ける。映画「茶の味」、NHK『からだであそぼ』出演等幅広い分野での身体表現に積極的に取り組んでいる。

●●●●● DANCE ●●●●●

国際共同製作

インバル・ピント・カンパニー 新作2007
（世界初演）

【日時】11月9日（金）　開演19:30 ／ 10日（土）　開演15:00 ／ 11日（日）　開演15:00
※9日の公演終了後、インバル・ピントとアヴシャロム・ポラックによるポスト・パフォーマンス・トークを行います。
【会場】**彩の国さいたま芸術劇場 大ホール**
【演目】新作2007（世界初演）　【振付・演出・衣裳デザイン・舞台美術デザイン】インバル・ピント＆アヴシャロム・ポラック
【出演】インバル・ピント・カンパニー　大植真太郎　森山開次
【チケット（税込）】
一般 S席6,000円　A席4,000円　学生A席2,500円　メンバーズ S席5,400円　A席3,600円
【発売日】メンバーズ 7月21日（土）　一般 7月28日（土）

essay　文=山形浩生（文筆家）

インバル・ピント・カンパニーのダンスを特徴づけるのは……と書きかけて、人は頭をかかえることになる。彼らの作品は、一作ごとにまったくちがう。一貫したトレードマーク的な様式があるわけでもない。

そしてむしろそれこそが、イスラエルで活躍する彼女たちの作品の特徴だ。一作ごとに、仕掛けは大きく変わる。ダンサーの身体にだけこだわり続けるようなストイックな審美性の追求は希薄で、むしろ多種多様な要素を思いつくままにぶちこんだ、グロテスクさとユーモラスさを前面に打ち出すことが多い。「オイスター」では義肢や人体の補助具的な延長を多用し、生身の身体と機械を接合させたような、ちょっと不気味でありながら／それ故に観客の目を捕らえて離さない動きの連続を演出してくれる。あるいは「ブービーズ」のように、半魚人をはじめとして人間でないものがひたすら跳梁跋扈する、異世界探検系SFアニメ（懐かしき「ファンタスティック・プラネット」を思わせる）を再現したような舞台。いずれも洗練されすぎないカーニバル的な猥雑性とパワーが魅力だ。

実は彼女たち以外にも、イスラエルは現在急激に文化的存在感を高めつつある。ダンスの分野では他にイツィク・ガリリが世界的に評価を高めているし（かれも猥雑さが売りだ）、音楽分野でもイスラエル・トランスはすでにダンスミュージックでは確固たるジャンルだ。科学や経済学、文学などの分野でも、イスラエル出身者の活躍は目覚ましい。

その多くに共通するのは、外部の各種の要素を貪欲に取り込もうとする意欲だ。イスラエルは、ユダヤ人国家という出自や戦争報道から、排外的なナショナリスト的印象を一部では持たれている。しかし一方で、同国は世界各地にいたユダヤ人のごった煮だ。そして現在でさえ、兵役やキブツでの勤労などの義務を果たした若者は、ご褒美に国費で世界旅行させてもらえる（といっても出るのは最初の拠点までの往復の航空券だけだとか）。日本でも、道ばたでガラクタ小物アイテムを売っている白人をときどき見かけるけれど、あれはそうした世界漫遊中のイスラエル人の滞在費稼ぎであることが多い。かれらが持ち帰る世界文化が、イスラエル文化には大いに影響していると言われる。

それはインバル・ピント・カンパニーにも顕著に感じられる。固定されたアイデンティティにとらわれない無節操なまでの変幻自在ぶりや、生真面目さに堕することのない泥臭さやユーモアのセンスは、自由なコスモポリタン的感性の反映だ。

sketch:Inbal Pinto & Avshalom Pollak　photo:Gadi Dagon／Elazar Harel／Eyal Landsman